(Ⅳ－89)　八ヶ岳山麓における田舎暮らしの生活実態

山梨大学工学部土木環境工学科　○学生会員　今井　智仁
(株) ハヤテ・コンサルタンツ　正会員　稲崎　昇一
山梨大学工学部土木環境工学科　正会員　大山　勲
山梨大学工学部土木環境工学科　フェロー　花岡　利幸

1. はじめに

農山村地域は、過疎化・高齢化現象の進展に伴い、農林業の衰退のみならず農村社会が崩壊しつつある。一方、近年の自然志向、環境志向の高まりの中、農山村地域において都市住民による定住人口や交流人口が増加するようになってきた。そこで本研究は、田舎暮らしを「一度、都会生活をしていた世帯、または現在都会生活をしている世帯が、生活時間の全体、または一部を中山間地域で過ごすこと」と定義する。

2. 目的

本研究は、田舎暮らしの「暮らし方」を「親自然型ライフスタイル」と定義し、その実態を浮き彫りにするためにその構造化を行う。そして、その構造に基づき、親自然型ライフスタイルの実態を明らかにし、その特徴を考察することを目的とする。

地方への転居者の意識調査[1)]や、田舎暮らしの意向調査[2)]などが行われているが、田舎暮らしの実態を詳細に捉えた既往研究はみられない。

3. 研究の方法

(1) 調査対象地区の選定

八ヶ岳山麓地域において、田舎暮らしの需要が比較的高い地域である、山梨県大泉村、高根町、須玉町、明野村、武川村、長坂町、白州町、小淵沢町、韮崎市と長野県富士見町、原村、茅野市、南牧村、小海町、八千穂村を調査対象地区として選定した。

(2) 調査方法

ライフスタイルの構造を把握するため、2000 年 4～6 月にかけて 23 名に「ヒアリング調査」を行った。その結果に基づいてライフスタイルの実態を把握する調査票を作成し、12 月に、郵送調査法と配布郵送調査法の併用で「アンケート調査」を実施した。配付数 421、回収数 211 票で、回収率は50.1%であった。

(3) 分析方法

定住世帯・非定住世帯別に集計し、さらに定住世帯をリタイア世帯・現役世帯に区分し、分析を行った。

4. 親自然型ライフスタイルの構造（ヒアリング調査）

田舎暮らしをする人（新住民）が求める生活は、「自然にふれあう生活」、「サラリーマン社会からの脱却」、「地元住民や同じライフスタイルの人々との付き合い」、「快適な居住空間」、「自給的食生活、自然素材を用いた手づくりの生活」などであった。このような都市生活にはない新たな生活を求めることが、親自然型ライフスタイルの特徴である。親自然型ライフスタイルを捉える項目は下表のように整理できた。

表－1　親自然型ライフスタイルの構造

ライフスタイルの軸	構成要素	
自然観	自然の質	自然の質
職業観	職業生活	都市での職業
		農山村での職業
		収入
生活観	生活空間	住まい方
		定住プロセス
		土地選定
		都市の住宅実態
		農山村の住宅実態
	消費生活	家計
	精神生活	暮らしの充実度
社会観	農山村社会との関わり	地元住民との付き合い
		農山村文化への関わり
		地元行政との関わり
	新しい社会との関わり	新住民との付き合い

5. アンケート調査結果および考察

(1) 自然観

①自然の質

身近に存在する自然に対して価値を感じている。景観

キーワード：田舎暮らし、農村、地域活性化
連絡先：山梨大学工学部土木環境工学科（山梨県甲府市武田 4-3-11）

が重要であり、特に山岳景観の存在が大きい。さらに手で土や植物に触れたり、香りを嗅いだり、自然の音を聞いたり、自然の味を味わったりといった自然との様々な接し方が大事であると考えている。

(2) 職業観

①職業生活

定住世帯の農村での職業を見ると無職世帯である「リタイア後の田園生活」が 37%で最も多い。次に「芸術家の工房・芸術創作活動」が 15%、「会社員の地方企業への転職、都会企業への通勤」が 17%、「店舗経営、民宿・ペンション経営、新規就農」など独立派が 17%であった。

収入は非定住世帯の半数が 1000 万円以上であり、都市と農山村の二重生活には経済的条件が必要であると考えられる。リタイア世帯では 300〜400 万円をピークに 500 万円以下で半数を占めた。現役世帯では 300〜700 万円の間が約 4 割を占め、特に富裕層ではない。

(3) 生活観

①生活空間

入居時期を見ると、全体の傾向としてバブル経済期(1986〜1990)以降、入居者が増えている。非定住世帯では 3〜5 年前、リタイア世帯では 5〜7 年前から急速に増加しているが、現役世帯では近年、減少傾向にある。

非定住世帯の八ヶ岳南麓の住宅利用状況は月に 1 回以上の週末利用が 66%、季節利用が 16%であり、非定住世帯は比較的頻繁に利用していることが分かった。さらに、週末利用をしている世帯では定住意思が高く (63%)、非定住世帯の週末利用は定住への助走期間として位置づけられているようである。彼らはリゾート的な利用ではなく、生活空間として農山村を認識していると考えられる。

②消費生活

都会生活と比べたときの生活費の各項目別増減とその理由を質問した。増えたものは「自動車費」であった。これは、公共交通の利便性が低い田舎では生活を営む上で自動車が欠かせないものであり、当然の結果といえる。一方「家計費総額」、「食費」、「住居費」、「衣料費」、「文化教養費」、「交際費」などは総じて減っている。これはライフスタイルの変化による減少であると考えられる。

③精神生活

農山村での生活を充実させるための活動を調査した。「家庭菜園、ガーデニング」、「ものづくり」の回答が多く、手づくりの活動が生活を充実させている要素であると解釈できる。都会生活に比べて充実感、満足感を得る場面をフリーアンサーで質問した。その結果、八ヶ岳山麓の自然環境、時間や空間のゆとり、静かさや静寂、人とのふれあい、に関連する場面で充実感、満足感を得ていることが分かった。

(4) 社会観

①農山村社会との関わり

付き合いがあると回答する率は非定住世帯で 14%と少なく、定住世帯で 46%と約半数であった。つきあいの内容は、定住世帯では「組の活動」、「水路清掃」、「冠婚葬祭」といった集落コミュニティーの付き合いが多く、現役世帯についてみると「仕事関係」、「子供を通じて」が多くなる。非定住世帯ではが多い。非定住世帯では「趣味・サークル活動」「あいさつする程度」が比較的多い。

②新しい社会との関わり

付き合いがあると回答する率は非定住世帯で 30%、定住世帯では約 70%であった。新住民との付き合いが地元住民に比べて活発であることが伺える。「趣味・サークル活動」の回答が 3 割を占めて多いのが特徴である。先に述べた生活を充実させるための活動を勘案すれば、手づくり、ものづくりを通じた付き合いを深めていると考えられる。

6. 結論

本研究では、都市住民の新たなライフスタイルに着目し、以下の結果を得た。

1) 親自然型ライフスタイルの構造を示した。
2) 親自然型ライフスタイルの実態を示し、特徴を考察した。

参考・引用文献

1) 国土庁地方振興局 (1999):「平成 10 年度 UIJ ターンに関する意識調査報告書」、国土庁
2) 国土庁ほか (1997):「農山村地域の活性化に向けた居住促進方策調査報告書」、国土庁・農林水産省・林野庁・建設省